

エッセイ 台湾研究を始めるということ

研究の始まりーアイデンティティを求めて

呉 密察（天神裕子訳）

私は昔ながらの素朴な農村に生まれた。村の人はほとんどが代々農家で、わずかに一二軒小学校教師や郷役場勤めの家があり、彼らは広義の公務員または新聞が読める程度の識字者と言える人だった。そのほかは字がわかるといってもせいぜい自分の名前が書けるだけだった。こうした社会のなかで、上述した広義の公務員以外の人々は政治とは無縁だった（無論当時は定期的選挙も行われていたが、一般人はただ人に頼まれるか買収されて投票に行くだけで、自分自身の政治に対する考えから投票していたとは言えなかった）が、しかし人々はやはり国民党政権の恐怖政治の性質と政治的プロパガンダ戦略を知っており、言論のタブーというものを分かっていたため、政治に対する自身の意見を表に出さず、政治への不信を心の内にしまいこむか、逃避や無関心の態度を装ってすらいた。

私はこのような政治に無関心で、政府に不信感を抱くという環境のなかで少年期（中・小学校時期）を過ごした。しかし好奇心が比較的強く、また少々議論好きな（理屈っぽい）子どもだったため、学校の教科書に書かれていた「嘘っぱち」（たとえば教科書には「建国記念日には、すべての家で国旗を掲げる」と書いてあったが、村中で国旗を掲げていたのは明らかに学校と派出所だけだった）に納得できず、しばしば疑問点について問いただした。そんなときいつも大人たちから「おかしいことを言う子だ（分をわきまえていない）」とみなされ、「有耳無嘴（子どもは大人のいうことをただ聞けばいい、口を出すな）」となるよう戒められ、制止された。それで私は幼いころから、教科書に書かれていることは学校の試験対策用に過ぎず、真実ではないと知っていたのだ！言ってみれば可哀想なもので、あんなに幼くして「見人説人話、見鬼説鬼話（相手を見て自分の言葉遣いや振る舞いを判断する）」ということを知ってしまったのだ。まさに「人格分裂」ではないか！こんな子どもはいったい聡明なのか？それとも不憫なのか？それは白色テロの横行する抑圧された社会のなかで、一般人が生きるうえでの知恵というものだったのだろう。

反逆の青春（高校時代）、田舎を離れて台南市の高校に学び、私の視野は当然広がったが、同時に家庭の管理からも解き放たれた。この時期、さまざまな文学や歴史学の本を貪り読む機会を得た一方で、学校の軍訓教官（救国団に配属された後で高校に派遣され、高校生の軍事訓練や思想管理をおこなう軍人）の締めつけに反抗し、それがまるで楽しみのように、しょっちゅうわざと教官とやりあっていた。つまり私の青春期の反抗は、素朴で保守的な田舎の家の教訓が届かない「やりたい放題」の状況のもとで、その矛先は高校の軍訓教官をはじめとする国家の管理体制に向けられていたのだ。

1974年の大学統一試験で、私は幸運にも台湾大学図書館学科に合格した。幸運、と言ったのは、

私の高校時代の「無法者（流浪人）」ぶりからすれば、一流大学に入るのはきわめて難しかったからである。そこで、台湾大学に入ったあと「努力して先頭に追いつく」よう懸命に勉強すると決心したのだが、このとき台湾大学の図書館に豊富な蔵書があったことが本当に有難かった。だが台北に出て大学に行くにあたり、私のような南部の田舎者にとって最大の課題は「アイデンティティ」の問題であった。

田舎の故郷台南では、私の知的認識と実生活はともに比較的小さな範囲のなかにあったため、その間のギャップは大きくはなく、適応できるかどうかという問題もほぼなかった。しかし台北にやって来て一切が変わってしまい、私はもはや「溪底寮の人」、「北門の人」、「台南人」という私の実生活の経験に見合った集団アイデンティティの意識ではなく、私の生活経験とは無縁の「中国人」というアイデンティティを持たねばならなくなった。しかも「中国人」の中にはさらに「外省人」と「本省人（台湾人）」が明確に区別されていた。省籍の区別は職業分布、社会階層のみならず、さまざまな価値判断にかかわる固定的な印象のうえにも表れていた。突然こうしたよく知らない、またひどく親しみづらい新たな環境を前にした私は、すっかり挫折感を味わい、空前のアイデンティティの危機に直面したのだった。このとき、二つのことが私を「救済」してくれた。

この頃、私はロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』を読んだ。当時どのようにこの小説に出会ったかはもう覚えていないが、多分あのころ読書を通して知識を吸収しようと努力していたなかで偶然出会ったのだろう。だが小説のなかの音楽家（ベートーベンがモデルであるらしい）が成長する過程で経験する失望、挫折、背叛、愛の喪失とそれを乗り越え成長していく姿は、確かに読む者の共感を呼び、癒しの効果をもたらした。のちに私はこれが教養小説の名著だと初めて知ったのだった！

大学一年の冬休み（1975年初め）、年越しのために帰郷した。村の外に出ていた人々もみな帰ってきたが、当然大勢の人が、村から台湾大学に合格したこの貴重な同郷の「秀才」に祝いを述べて来て来た。しかし私はかえってどうしたらいいかわからず、恥ずかしさと自責の念で落ち着かなかった。（故郷の人はみな私を誇りに思っていたが、私が学んだ書物の中では、むしろ彼らは愚かで恥に値する存在だと書かれていたのだ！）冬休みのまだ終わらない旧正月の五日目に、私は荷物を背負って「家を飛び出し」、ひとり鹿港と霧峰菜園を訪れた。鹿港の古い町並みと霧峰の菜園を巡り歩くうち、私はついにこうした場所こそ私が帰属する場所なのだと分かった。自分の足で実際に歩いた土地こそが私の拠り所なのだ。私は孤独でも寄る辺のない身でもなかったのだ！新しい学年が始まるとすぐ（1975.02）、私は歴史学科の鄭欽仁教授（当時私は鄭教授の「中国通史」を受講していた）に言った。もっと多くの台湾史について知りたい！と。そこで鄭教授は私を、すでに台湾文献委員会を退職されていた王詩琅先生に引き合わせてくださった。そのときから、王詩琅先生の家が大学以外での私の台湾史の学校となり、また私は雑誌『台湾風物』の編集を手伝うようになった。当時日本の学者（たとえば河原功、若林正丈、下村作次郎さらに伊藤隆も）にとって、王詩琅先生は台湾近代史を理解するうえで重要な手がかりであり、私自身もまた「王詩琅学校」の長期受講生兼用務員であった。

台湾の歴史を理解するのだと心に決めたとき、私はまたどうあっても歴史学科に転科しようと決心したが、同時に台湾大学図書館の豊富な蔵書を存分に利用したいと考えた。当時の台湾大学図書館は閉架式で、一般の学生は直接書庫に入って本を探すことができず、検索カードに記入して図書館スタッフに渡し、書庫から本を出してきてもらわなければならなかった。つまり図書館に多くの貴重な蔵書があっても、本棚の前で自由に本を選べないため、視野を広げる可能性が狭められていた。しかし、図書館学科の学生だけは閉架式書庫と雑誌や貴重資料を収蔵する研究図書館に入ることができた。私はこの「恩恵」を利用して台湾大学図書館を満喫した。とりわけ、当時の台湾大学図書館の書庫の片隅には、日本時代以来の所蔵登録されていない各種の日本語図書があり、さらに日本時代に遺されたさまざまな手稿資料や、戦後「国策（反共、独裁、抗日）にそぐわない」とみなされた禁書さえもあった。私は時間があればすぐに図書館の閉架式車庫で「宝探し」をし、知識と視野を大きく広げ、一方で国民党政府が国民の知識や視野をいかに狭い範囲のなかに閉じ込めているかを思い知った！大学時代、私は『台湾文献叢刊』を小説のように読み、『台湾研究叢刊』の台湾の歴史に関する事項にすべて目を通して確認した。言ってみれば、その後の台湾史の研究は、図書館学科での基礎訓練と台湾大学図書館の豊富な蔵書に受けた恩恵が大きかった。

私の大学時代（1974-1978）はまた、国民党政権の権威体制が揺らぎ、改革の推進が必須となった「革新保台（新政で台湾を危機から脱却させる）」の時代であった。『台湾政論』（1975）、『夏潮雑誌』（1976）の発刊、そして郷土文学論争（1977）といった民間の力の噴出は、私の四年間の大学生活とほぼ重なっていた。つまり、私はまさにこうした環境のただなかにいたのであり、直接参加していなかったとはいえ、ある意味「その場に身を置いていた」のである。

大学三年（1976.08-1977.01）のとき、台湾史の専門家楊雲萍教授が定年退職される（退職後も兼任教授の名義で研究所の講義を続けておられた）前の最後の一年に滑り込み、私は教授の「台湾史」、「明史」（もうひとかたの先生と合同で開講された）という二つの講義を一気に受講した。楊教授は1920年代に台湾新文学の創始に尽力した人物であり、1930年代にはさらに台湾文献学の研究を進められ、戦後初期にかけて台湾を代表する文化人であった。1947年に台湾大学歴史学科の教授に転任し、偶然にも「台湾史」の授業を開講されたが、その講義の重点は台湾の歴史というよりはむしろ台湾の歴史的文献についてであった。また彼の詩人で哲学者という気質による鋭い洞察力（insight）溢れる言葉のひとつひとつが、私たち学生にとって最大の収穫だった。

「明史」の授業では、私は鄭成功の幕僚であった楊英の『從征実録』を研究史料として、鄭成功集団が民間から食料を脅し取ったことについて述べた学期末レポートを書いた。のちにこの文章は学生雑誌に掲載され、私にとって初めて活字化された「研究成果」（これを研究成果というのは自分でもはなはだ赤面ものなのだが）となった。この文章の最大の意図は、当時の鄭成功研究の主流の立場に挑戦したことであった。主流の立場とは、17世紀の鄭家の政治スローガン（反清復明）を強引に20世紀の蔣介石一家の政治スローガン（大陸反攻）と照らし合わせて、鄭成功を中国の民族主義の宣伝材料（鄭成功はオランダ人を駆逐した民族英雄である）とするものであった。私の文章は研究というよりむしろ上述の教条に対する挑戦状だった。それは学生雑誌に

発表した学期末レポートであり、もともと注目されるはずもなかったものだが、米国の南明史研究の専門家である Lynn A. Sruve 教授の目に留まった。多分彼女もすでに数えきれないほど似たような鄭成功研究の文章を読んで飽き飽きしていたのだろう、私の文章は少し「ふつと違う」ことを発見したのだ。教授は、私が 20 世紀の鄭成功研究は中国民族主義に縛られて客観的研究がされていないことを「大胆」に指摘し、鄭成功に対し非常に尋常ならざる、何ものにもとらわれない分析をした、と称賛した。実際のところ、彼女のいう「大胆」とは「白目（台湾語、“空気が読めない”ことを指す）」とみなされるべきだった。なぜなら、本当に『從征実録』という史料を読んだことがありさえすれば、誰もが鄭氏集団に対して当然私と同じ評価をしたはずだからだ。ただかれらはその文章の文言を直接引用しさえすれば「史料がおのずと語る」と考えていたのかもしれないし、あるいは卒なくやりすごすために、時流に逆らってまで自分の意見をはっきり言おうとしなかっただけなのかもしれない。明らかに、この呉というそそっかしい若輩者は「細漠の不驚銃（若造は銃を恐れず）」で、「王様は裸だ」と大衆の面前で叫んでしまったのだ！しかし、歴史研究において必ず存在する中国の民族主義的解釈という枠組みに対抗することは、確かに私の一貫した重要な立場であった。

大学四年に進級（1977.08-1978.06）し、自分でも次第に大学の統一試験に出願した際の「軽率さ」に決着をつけねばという気持ちになった。当時世間では、男子学生は勉強ができる（学校の試験の成績がよい）ならば医学科、理工科に進むべきであり、たとえ社会科学部でも財政や経済、法律などを専攻すべきだとみられていた。しかし私は「わがまま」にも心の赴くままに文学部を選択したのである。いま、あと一年で卒業し社会に出ねばならないという現実に直面し、私は自分に「最後のロマン」を味わう機会を与えた。卒業論文を完成させ、私の軽率な少年時代に別れを告げようではないか！

だが卒業論文に何を書いたらいいのだろうか？台湾の歴史は私にとってアイデンティティの重要な拠り所ではあったが、私の人生に比較的關係の深い日本時代のテーマで書こうと思ってみたものの、具体的に何を選ぶべきなのかわからなかったため、もっとも簡単な方法で決めることにした。そうだ、ならば日本時代の幕あけをテーマとして選ぼう、台湾の日本割譲と台湾民主国について書こう！このテーマについては、文献委員会の雑誌で当然すでに多くの「研究」があった。しかし、やはりそれらはすべて、この歴史的事件を「日本帝国主義がいかに傍若無人に中国を侵略し、中国（台湾の一切は当然ながら中国に属するという文脈である）がいかに感動的かつ果敢に抵抗したか」という類の歴史的解釈であった。これらの文章を読んだ後で、私はすこぶる気分が落ち込み、このテーマを放棄してしまおうかとすら思った。しかし唐景崧の優秀な右腕である俞明震の「台湾八日記」という史料を見つけて、私は追いつめられた精神状況から脱することができ、それで書き続けようとしたのである！生きた史料こそが、歴史を活かすことができるのだ！

研究を続ける決心をしたあと、私は膨大な数の史料を読んでいくかわら、さらに海外の先行研究（文献委員会の雑誌はすでに参考の価値はなかった）を収集し始めたが、このとき米国の学者 Harry Lamley の論文を発見した。彼は 1895 年の台湾割譲と台湾の抵抗を専門に研究するシア

トルのワシントン大学の歴史学博士で、当時はハワイ大学で教鞭をとっているようであった。米国の博士論文のコピーは手に入れるルートがあったため、それで当面の課題は Lamley の研究成果を吸収することになった。次いでその当時、台北の邱永漢書局で奇跡的に黄昭堂の『台湾民主国の研究』（東京大学出版会、1970）を購入することができた。黄昭堂という名前は台湾ではもともと禁忌であったはずなのに、なぜその著書が公然と台北の書店の本棚に並び、私に買われるのを待っていたのか！私は今でもこれを奇跡だと思っている。恐る恐るその本を買い、いつも本にカバーをつけないのに、その本にだけ特別にカバーをつけたのだった。しかし続いて学術研究のうえでの大きな障壁が私の前に立ちはだかった。ワシントン大学の英語の博士論文1本、東京大学の日本語の博士論文1本を前にして、一介の大学四年生の私がまだ何を「やろう」というのだ？当時はしょっちゅう夜中まで筆が進まず、ただ巨大な心理的プレッシャーを抱えて、台北の薄暗い街灯の下を、茫然と夜明けまで歩き回った。そしてある日、突然パッと目の前が明るくなった。私は何のためにその二つの巨大な山のような先人を越えようとしていたのか？具体的問題点をいくつか突破しさえすれば、それでよいのではないのか？当時の各種の電報を緻密に比較しさえすれば、台湾民主国を成立させるというこの「独創的な発想」の経緯を描き出すことができるのではないのか？そして、こうした「自分に甘い」対策のもと、私の学士論文はついに完成した。この論考について簡単に紹介するなら、すなわちそれは、台湾民主国成立のアイディアマンとは、これまで指摘されてきた丘逢甲でも陳季同でもなく、実は当時清国がフランスに派遣した外交官の王之春だったということである。王之春の提案が、南洋大臣張之洞を通して台湾巡撫の唐景崧に伝えられ、そして唐景崧が丘逢甲を指名して「台湾の民意」を代表させ、彼が台湾民主国を成立するのに協力した。しかし、張之洞は「分家して新しい家を構える」などということは、差し障りがあると考え、唐景崧に対し、名目や言葉遣いなどの表現において「臣節を重んじ」てこそ、朝廷は「御高察下さる」と注意を喚起した。

私は1978年6月に卒業し、工学部の教授が清代台湾の災害史料を収集するのを手伝う（私が『台湾文献叢刊』を通読し、台湾史の史料を比較的熟知していることは皆に知られていた）かたわら、一方で今後の行く先を考えた。大変幸運なことに、このときちょうど歴史学科の助教のポストに空きがあり、私の求職申請が通ったのだった。そして歴史学科の助教を2年務めたあと、予期せずして学術研究の道を歩むこととなった。そこでもともと私の台湾史追究に別れを告げるために書いた卒業論文の一部を修正して『台大歴史学報』（1981）に発表し、それが私にとって初めての「台湾史研究」の論文となったのである。